第48回

喜多流 青年能

東岸居士●高林昌司
杜若●友枝雄太郎
猩々乱●谷 友矩

2020年9月26日㊏
12:00 開演 (10:30 開場)

十四世喜多六平太記念能楽堂
主催 公益財団法人 十四世六平太記念財団
協力 一般社団法人喜多流職分会

チケットご購入のご案内

一般前売券 3,500円(当日券 4,000円) / 学生前売券 2,000円(当日券 2,500円)
発売日: 2020年7月20日㊊ 午前10時〜

●チケット予約購入のご案内
新型コロナウィルス感染症拡大防止のため、キャッシュレス決済を推奨させていただきます。

●インターネット24時間対応 / 要事前登録(無料)
喜多能楽堂ホームページ http://kita-noh.com/

【お受け取り・お支払い】
①セブンイレブン
ご予約の際画面に表示された受付番号をレジにご提示の上チケットをお受け取りください。お支払いは現金またはクレジットカードをご利用いただけます。ご予約の際クレジットカードで先にお支払いを済ませていただくことも可能です。

②窓口(喜多能楽堂事務局)
クレジットカードでお支払いの上(ホームページでのWeb決済)、ご予約の際画面に表示された受付番号を窓口にご提示の上チケットをお受け取りください。現金でのお支払いはできません。

●電話予約
喜多能楽堂事務局 03-3491-8813
午前10時〜午後6時 / 休館日あり、営業時間短縮あり

【お受け取り・お支払い】
①セブンイレブン
ご予約の際お伝えする番号をレジにご提示の上チケットをお受け取りください。お支払いは現金またはクレジットカードをご利用いただけます。

②郵送
チケット代金と手数料を指定の銀行口座にお振込みください。入金確認後、簡易書留にてチケットをお届けいたします。

③窓口(喜多能楽堂事務局)
ご予約の際お伝えした受付番号を窓口にご提示の上チケットをお受け取りください。お支払いは現金のみとなります。

※お受け取り・お支払い方法によって別途手数料がかかります。ご予約の際にご案内いたします。
※ご予約いただいたチケットのキャンセル、変更はできません。

●窓口
喜多能楽堂事務局 03-3491-8813

【お受け取り・お支払い】
お支払いは現金のみとなります。

●各同人でもチケットを受付しております。

＊ご注意
- 開演中の途中入場はお断りいたします。
- 未就学児童のご入場はご遠慮ください。
- やむを得ない事情により出演者が変更になる場合がございます。
- 許可なき写真・ビデオ撮影、及び録音はお断りいたします。
- 客席での携帯電話やスマートフォンなど音や光の出る電子機器のご利用はお断りいたします。
- ロビー・見所でのご飲食はできません。感染症拡大防止のため、2階ラウンジでのご利用の制限をさせていただくことがあります。
- 喜多能楽堂は全館禁煙です。屋外喫煙所をご利用ください。
- お席を離れる場合は貴重品、お手回り品にご注意ください。盗難・紛失についての責任は負いかねます。
- 係員の指示に従っていただけない際には退場していただく場合がございます。

JR線、東急目黒線、都営三田線、東京メトロ南北線ともに目黒駅下車、徒歩7分
＊当能楽堂には駐車場がございませんので、お車でのご来場はご遠慮願います
＊許可無き写真撮影・録画・録音等は固くお断りいたします

十四世喜多六平太記念能楽堂
〒141-0021 東京都品川区上大崎 4-6-9
TEL 03-3491-8813

●次回 2020年5月青年能振替公演
2021年3月27日㊏
10:30 開場/12:45 開演
能 玉葛●金子龍晟
能 是界●狩野祐一

喜多流 青年能

番組

仕舞

岩船　金子龍晟　友枝雄太郎
佐藤寛泰
塩津圭介
谷　友矩

半蔀　狩野祐一

能

東岸居士

シテ・東岸居士　髙林昌司
ワキ・旅人　御厨誠吾
間・清水寺門前の者　山本凛太郎
後見　髙林呻二
大島輝久
大鼓　柿原孝則
小鼓　森　貴史
笛　熊本俊太郎
地謡　金子龍晟　塩津圭介
谷　友矩　内田成信
佐藤　陽　金子敬一郎
狩野祐一　佐々木多門

狂言

千鳥

シテ・太郎冠者　山本則重
アド・主人　山本泰太郎
アド・酒屋　山本則秀

休憩・二十分

能

杜若

シテ・里女（杜若の精）　友枝雄太郎
ワキ・旅人　大日方寛
後見　粟谷浩之
佐々木多門
大鼓　佃良太郎
小鼓　曽和伊喜夫
太鼓　澤田晃良
笛　藤田貴寛
地謡　金子龍晟　友枝真也
佐藤寛泰　友枝雄人
塩津圭介　長島　茂
狩野祐一　大島輝久

休憩・二十分

能

猩々乱

シテ・猩々　谷　友矩
ワキ・高風　野口能弘
後見　谷　大作
友枝真也
大鼓　國川　純
小鼓　曽和正博
太鼓　林雄一郎
笛　杉信太朗
地謡　友枝大風　佐藤寛泰
髙林昌司　狩野了一
佐藤　陽　中村邦生
友枝雄太郎　粟谷充雄

終了予定時刻　午後五時過ぎ予定

東岸居士

東国から来た旅人が京都の清水寺へ参る途中、白川の橋のほとりで東岸居士に出会う。今日の説法を尋ねると、「万事は皆目の前に見るものだから、『柳は緑、花は紅』である」と答える。さらに旅人はこの白川の橋は誰が掛けた橋なのか問うと、先師の自然居士が架け、今では自分が、このように補修するために、勧進しているのであると答える。そして、東岸居士の素性を聞くと、自分は本来住む処がないので、出家というべき謂れもなく、髪も剃らず法衣も身に着けずにいるのだと答え、旅人に悟りの境地に至りなさいと勧める。東岸居士は旅人に面白く謡って聞かせてほしいと頼まれ、言われるままに舞を舞い、鞨鼓を打って、遊芸のうちに仏法を信じるよう説いて聞かせる。

杜若

都から旅人が三河国八橋を訪れる。旅人が一面に咲く杜若に見惚れていると、里の女が現れ、『伊勢物語』にある八橋の杜若の故事を語る。「からころも　きつつなれにし　つましあれば　はるばるきぬる　たびをしぞおもふ」の古歌を詠じ、在原業平が詠んだ歌だと教え、旅人を自分の庵室へと案内する。やがて女は色鮮やかな装束に冠を着して現れる。装束は在原業平と契った高子の后のもの、冠は業平が宮中で五節の舞を舞った時のものだと言い、自分は杜若の精だと告げる。杜若の精は『伊勢物語』の恋物語を舞い表し、夜が白むとともに姿を消した。

猩々乱

中国の金山の麓に高風という者がいた。彼は親孝行者であったために、夢の中で、揚子の市に出て酒を売ると富み栄えるというお告げを受け、それに従うと、彼は次第にお金持ちになっていた。ある日、童子が一人店へ訪れる。彼は酒を次々と飲んでいくものの、全く顔色を変えず酔う気配もない。不思議に思った高風が素性を尋ねると、海中に住む猩々であると名乗り姿を消す。高風は洛陽のほとりで酒壺を用意して猩々が現れるのを待っていた。やがて猩々が現れ、高風と再び会えたことを喜び、盃を傾ける。猩々は隈なく輝く月星を賛美し、芦の葉が風に吹かれて笛のように鳴り響く音色や、鼓のように響く波の音に乗って舞を舞う。そして、高風には酒が尽きることなく湧き続ける酒壺を授けていく。酔いも進み、高風が目を覚ますとその酒壺だけが残っており、その後も彼の家は末永く栄えていった。（猩々乱では通常の猩々とは異なり、中の舞を舞わずに足遣いが特徴的な演出に変わります）